Japanese Council of Science Museums Newsletter Vol.40. No.6

全科協ニュース

URL http://www.jcsm.kahaku.go.jp/

全国科学博物館協議会 〒110-8718 東京都台東区上野公園 独立行政法人国立科学博物館 Tel.5814-9863 Fax.5814-9898 平成22年11月1日発行（通巻第235号）

特集：読書のすすめ2010

昨年度に引き続き、読書の秋にちなんで本の特集を企画いたしました。科学系博物館の職員に読んでほしい本を、今回は１人につき３冊、今年読まれたものを中心に紹介をお願いしました。全科協加盟館園の方々に加えて、今回は小説家の瀬名秀明さんほか４名の方々にも執筆いただいております。12名の皆さんからの36冊となる予定でしたが、2名の方から重複して紹介された本が２冊ありましたので34冊となりました。石田戢著『日本の動物園』と井田徹治著『生物多様性とは何か』です。今年のイチオシとして特記いたします。（本紙編集委員　畠山泰英）

岩槻 邦男

（兵庫県立人と自然の博物館館長）

『日本の動物園』石田戢著、東京大学出版会、2010年

東京大学出版会のナチュラルヒストリーシリーズは，博物館関係者にとってはすべて必読書というべきだろうが，とりわけ糸魚川淳二『日本の自然史博物館』『新しい自然史博物館』，岩槻邦男『日本の植物園』は博物館等施設について述べたものであり，本書も日本の動物園についての総論である。動物園は日本語では植物園と並んで語られることが多いが、欧米では、zooなどという愛称が固定されてしまい、今でもbotanical garden としゃちほこばっている植物園に比べるとずいぶん大衆化している。その動物園の近代化が、とりわけ博物館等施設の活動が時代遅れになっていた日本で、どのように展開して来、発展しようとしているかが要領よく記述されている。動物園学のすすめ、と謳われているが、たまたま『日本植物園協会誌』に勧められ、最新号に「植物園学を育てる」を寄稿したところだったので個人的にはますます興深く読ませてもらった。博物館関連施設において、生涯学習支援にいかに貢献するか、シンクタンク機能をいかに有効に活かすか、職員のあり方、とりわけ学芸員とは何かを、社会と共に考える語りかけであるのと並行して、博物館関係者に鋭く問われている問題提起でもある。

『文明としての江戸システム』鬼頭宏著、講談社（講談社学術文庫）、2010年

日本列島に住む人がどのように自然と共生してきてきたかを跡づけることに関心をもっているが、最近の日本史で、とりわけ歴史人口学などの実証的な研究によって、一般市民の生き様の変遷が確かめられるようになったことはたいへんありがたい。本書の場合も2002年に刊行されたものではあるが，講談社学術文庫の「日本の歴史」シリーズに収録されることで、一般読者にとっても近づきやすく、全体観を見据える資料になった。

『生物多様性とは何か』井田徹治著、岩波書店（岩波新書）、2010年

国連が定める国際生物多様性年の今年、生物多様性について書かれる本が多いが、その１冊である。字数に余裕がないので、書名の紹介にとどめる。

黒田 武彦

（兵庫県立西はりま天文台公園園長）

できるだけ専門分野外の書物を読もうと努力しているが、気がつけばやはり天文関係が多い。ベストセラーになった渋川春海を扱った沖方丁の「天地明察」は恐らく多くの方が既に読まれたと思い、紹介からは外した。私の専門分野の普及書、専門書、そして管理運営面での参考になると思われる書籍の計3冊をご紹介したい。

『カラー図解でわかるブラックホール宇宙』福江純著、ソフトバンククリエイティブ（サイエンス・アイ新書）、2009年

ブラックホールは解説を読んでわかったつもりになっても、ふと気がつくとまた悩んでしまう難解な対象である。福江さんは、自らの専門でもあるこの分野を正確に、楽しく、美しく解説してくれている。普及書であるため数式はほとんど登場しないが、内容は濃厚である。科学館で利用者の質問に答えたり、わかりやすい展示を考える際に有用な一冊になるだろう。

『銀河進化論』塩谷泰広・谷口義明著、プレアデス出版、2009年

最新の学問成果を扱った銀河の専門書である。最遠銀河や宇宙ダークマターの観測で世界をリードしてきた著者に相応しく、観測結果に裏打ちされた銀河の説明がすばらしい。内容は高度だが、じっくりと読んでいくと宇宙の中での銀河の役割が見えてくる。随所に挿入されたコラムは、観測や研究のエピソードが散りばめられていて著者の姿が生き生きと伝わってきて興味深い。

『北九州市立大学改革物語－地域主権の時代をリードする』矢田俊文著、九州大学出版会、2010年

現役の学長による大学の改革を扱った本であるが、科学館等の改革にも大いに参考になる。教員を学芸員に、学生を利用者等に置き換えて読むだけでも得るものがある。社会貢献に大きな力を割き始めた大学であるが、科学館や博物館といえども、大学の所有する一次資料には及ばないことが多い。大学博物館等に直接触れているわけではないが、大学の本腰の入れ方から学ぶべきことも多い。

篠原　徹

（滋賀県立琵琶湖博物館館長）

「読書のすすめ」というようなタイトルで最近読んだ本のなかから推薦するに値する著作を３冊選び出すことは簡単なようでむつかしい。孤島で生活することになって１冊だけもっていっていいといわれたら「君は何をもっていく」とか、海外に数週間でもいくことになって「何をもっていくか」という遊びのような質問に答えるのとは異なっている。このような問いなら、繰り返し読んでも厭きないということが必要条件だし、それでいて中身が重厚で含蓄の深い書物であることが十分条件であろう。

趣味も関心も多様化しただけではなく、学問領域も多様化している現在、誰が読んでもおもしろくて意義深い本というのは存在するのかという根本的な疑問をもちつつ「読書のすすめ」として最近読んだものを述べてみたい。乱読を本の読み方の基本にしているので、系統性や出版年次などは無関係である。

『虫食む人々の暮らし』野中健一著、日本放送出版協会（NHKブックス）、2007年

食料難になって人間が最後に頼るのは生態学的にいって昆虫食ではないのかと思えば、気持ち悪いなんて言ってられない。

『欲望の植物誌－人をあやつる４つの植物』マイケル・ポーラン著（西田佐知子訳）、八坂書房、2003年

リンゴ・チューリップ・マリファナ・ジャガイモの物語つまり人間と植物とのかかわりの歴史なのであるが、圧倒的におもしろい読み物である。帯に「人間を誘惑しようとする植物たちの欲望がひそんでいる」とあるが、とんでもない、人間のあくなき欲望こそが問題なのである。人間に手なずけるために人間がおこなった植物への介入がすごい。

『生物多様性という名の革命』デヴィッド・タカーチ著（狩野秀之・新妻昭夫・牧野俊一・山下恵子訳）、日経BP社、2006年

生物多様性ということがいかに重要であるのかということを実践的なテーマにとどまらず哲学・思想としても重要な課題であることを提起している。

瀬名 秀明

（作家）

人文・社会・自然科学の研究領域をダイナミックにつなげる三作を紹介する。いわば紙上で開催される大企画展だ。現実のミュージアムでもたっぷり一日を費やして、こんな展示を堪能してみたい。そんな願いを込めて……。

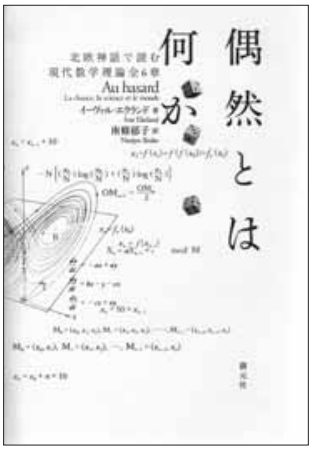
1.『偶然とは何か―北欧神話で読む現代数学理論全6章』イーヴァル・エクランド著、創元社、2006年

2.『交響するコスモス』上下巻、中村靖子編著、松籟社、2010年

3.『空の戦争史』田中利幸著、講談社（講談社現代新書）、2008年

1.は外交官と哲学者の両親を持つ数学者が、まるで一編の長編小説のような美しさで描き出す、世界の本質についての物語だ。神話で最初に起ち現れる「混沌（カオス）」とは何か。著者は中世の王たちがダイスを振って領土を決めた故事から確率論を展開し、非業の死を遂げた王子の物語を枕にこの世の運命は偶然なのか必然なのか、世界に意味があるとはどういうことかを深く探ってゆく。思慮深い文章は随所に挿入された数式を美しく引き立たせる。著者の視座はそのままテッド・チャンなど現代ＳＦ作家の小説へとつながっており、読書の真の歓びを与えてくれる。

2.は名古屋大学の研究者らがまとめ上げた、私たち人間の精神とこの宇宙に関するシンフォニーである。まずは哲学者が古代ギリシアに始まるコスモロジーを説き起こし、フロイトやニュートンの功績が再検討される。執筆者らはプロジェクト資金でメキシコへ飛び、マヤ文明の遺跡を目の当たりにして文理融合の未来を見据える。さらにバトンはインド思想から最先端の天文学の成果へ、ウィリアム・ジェームズの心理学から脳イメージング研究へと受け渡され、最後は文化人類学者・今福龍太の環境論で締めくくられる。大部の２冊が終わっても探求は道半ばであるが、だからこそさらなる旅を共有したくなる。これがほんとうの学際である。名古屋大学は本書をもとに企画展をおこなうべきだ。



3.は空からの視点が人類に何をもたらしたのかという、現代の認知発達心理学ともつながる論点が興味深い。人は空から見下ろすことで地上の人々への共感を切り離し、それが第一次大戦後には無差別の空中爆撃を「人道的」とさえ位置づける戦略論へと発展したというのである。終章で語られる日本空爆や原爆投下も、著者のそうした問題意識によって新たに心に迫るものがある。思考が膨らむ一冊だ。

平　朝彦

（海洋研究開発機構理事、地質学）

科学は実験に基礎を置く。ノーベル賞の研究には、実に単純で明快な実験から構成されているものも多い。ロバート・P・クリース著（青木薫訳）**『世界でもっとも美しい10の科学実験』**（日経BP社、2006年）は、古今の科学実験から“ベスト10”を選んで、その科学的背景から内容まで、非常に分かり易く説明した科学史の好著である。その中で、私がもっとも美しいと思うのは電子の電荷の大きさを測定した「ミリカンの油滴実験」である。見えない電子を見えるようにしたことが、驚きであるし、原理はまことに単純、やはり美しい。

科学は観察にも基礎を置く。地質学では、地層を観察して、地球の歴史を読み取る。ただし、容易ではない。一つには訓練、そして、もう一つは才能とも言うべき直感が重要である。現場百度というが、突然、物が見えるようになることがある。大きな喜びとともに、その場で、「なぜ今まで分からなかったのか」と叫んでしまう。白尾元理写真、小疇尚・斎藤靖二解説**『新版日本列島の20億年―景観50選』**（岩波書店、2009年）は、ダイナミックな日本の地質・地形景観を50選んで、日本列島の成り立ちが分かるように、写真と解

説で説明したユニークな本である。ちなみに、私が最も好きなのは、四万十帯のチャートの写真である。私も叫んだ一人だから。

科学は分析にも基礎を置く。海には有孔虫という微生物が生息しており、炭酸カルシウムの殻を作る。一粒の殻の酸素同位体比を分析すると、地球全体の氷の量が分かるのである。驚くべきことだ。これによって、氷河時代の謎が次々と解明され、同時に、気候変動が極めて複雑な要因によることが分かってきた。この科学史上最もエキサイティングな発展の一つを見事にまとめた本がある。大河内直彦著**『チェンジング・ブルー―気候変動の謎に迫る』**（岩波書店、2008年）である。この本は 2009年の講談社科学出版賞を受賞した。

垂水 雄二

（翻訳家、科学ジャーナリスト）

『創造－生物多様性を守るためのアピール』エドワード・O・ウィルソン著（岸由二訳）、紀伊國屋書店、2010年

表題に「生物多様性」を掲げた書籍は数多いが、御本家ウィルソンの手になる本書はまず読んでおくべき一冊。タイトルにおそれをなして見過ごすのは惜しい。訳者が解説しているように、ここでの「創造」というのは（神が創造した）多様な生き物に満ちあふれた世界という意味であり、「生物多様性」とほぼ同義である。米国において圧倒的多数派をなすキリスト教徒への、進化論を認めないとしても、豊かな自然を守ることに関しては一緒に手を組めるはずだという訴えである。牧師に宛てた手紙という構成の是非はともかく、内容は抜群に面白い。最大の魅力は、専門のアリを初めとして、微少な生物の世界の多様性がしっかり語られている点である。

『進化の運命－孤独な宇宙の必然としての人間』サイモン・コンウェイ＝モリス著（遠藤一佳・更科巧訳）、講談社、2010年

『ワンダフル・ライフ』に描かれたカンブリア紀の奇妙奇天烈な生物の姿に感激し、スティーヴン・ジェイ・グールドの進化観に説得された読者は多いだろう。この本は、進化は運任せで、やり直しがきかないというグールドの考え方に真っ向から反論し、さまざまな制約のために、人間に至る進化はほとんど必然だったと主張する。証拠として提出されるのが、生物のあらゆる形態や機能に見られる収斂現象である。収録された膨大な収斂の事例は、それだけで読む価値がある。

『代替医療のトリック』サイモン・シン＆エツァート・エルンスト著（青木薫訳）、新潮社、2010年

ピルトダウン事件や旧石器捏造事件など、学問の世界にもインチキの例がないわけではないが、医学の領域では人の命がかかっているだけにことは重大である。本書はホメオパシーをはじめとする代替医療の有効性に科学的なメスを入れた決定版。

中川 志郎

（茨城県自然博物館名誉館長、財団法人東京動物園協会顧問、財団法人日本動物愛護協会理事長。専門分野：動物園学、動物比較生態学）

『日本の動物園』石田戢著、東京大学出版会、2010年

ここ半世紀ほどの間に、日本の動物園、水族館は大きな変貌を遂げた。野生動物の展示・教育・レクリエーションから研究、希少動物保護増殖へとシフトし、更に、人と動物の関係を科学する場へと変貌する。著者は、その変動期の真っ只中を文学部出身という異色の背景を持つ動物園飼育畑の専門家として過ごし、日本人の「動物観」を追い求めてきた。現在は帝京科学大学で、その成果を講じているが、本書は、その題名通り現代におけるわが国「動物園学」の集大成と言ってよいであろう。

『共感の時代へ』フランス・ドゥ・ヴァール著（柴田裕之訳）、紀伊国屋書店、2010年

人と動物の関係、或いは人と人の関係を科学する上で、動物園における研究の果たす役割は大きいが、本書もまた

その卓越した成果の一つといってよいであろう。著者は、既にオランダのアーネム動物園での長期研究をもとに『チンパンジーの政治』（邦訳は産経新聞、2006年出版）を表し、類人猿の行動分析で独特の境地を示したが、本書は、其れを更に奥行きを深め、多くの霊長類の行動が人に類似する「共感」にあり、それは人をも含む多くの動物行の基盤ではないか、と提言する。人と動物の共生を考える上で重要な示唆となろう。

『環境倫理学』鬼頭秀一・福永真弓編、東京大学出版会、2009年

人と動物の関係をさらに広げていけば人と自然、人を取り巻く環境との関係となろう。本書は人が自然環境に及ぼす影響を二項対立的な図式で明らかにし、その問題点をあぶりだそうとした野心的な試みである。何よりも現場感覚を大事にしつつ、その延長線上に生物倫理、環境倫理的視点で捉えた解決策を模索する姿勢は、ともすれば観念的になりがちな環境問題を生身の課題として突きつける。理系、文系いずれにも読んでほしい内容だ。

中島 義和

（日本科学未来館副館長。外資系自動車会社日本法人社長を歴任後、2006年より現職。ビジネス、マーケティング分野における国際的なキャリアと組織運営の実績を活かし、未来館の運営全般を担う。）

『科学技術は日本を救うのか～第四の価値を目指して～』北澤宏一著、ディスカヴァー・トゥエンティワン、2010年

科学技術振興機構理事長を勤める著者は、まず日本の若者が米国や中国・韓国の若者に比べ将来に夢が持てないでいるという調査結果から論を起し、若者だけではなく大人も夢を失っている現状をこのまま無策で放置してしまう危険性に警鐘を鳴らし、科学技術で未来を創ろうと呼びかけます。著者の論点は①日本科学技術力は世界のトップクラス。②にもかかわらず日本が経済不況に陥っているのは技術革新が経済政策・成長戦略と上手くシンクロしていない。③成長の鍵は第四次産業/第四の価値が握る。というものですが、第四の価値とは何でしょうか？それは読んでのお楽しみに。

『おごるな上司！～人事と組織の管理学～』堀田力著、日本経済新聞社、1994年

私が会社役員に就任した16年前に部下の一人がプレゼントしてくれた一冊です。以来毎年読み返しては自らの戒めとしています。経営幹部や部下のあるマネージャーにお勧めです。その後講談社および日経より文庫本としても出版されています。

『琉日戦争一六〇九～島津氏の琉球侵攻～』上里隆史著、ボーダーインク、2009年

今年前半基地問題で鳩山政権が迷走し沖縄県民を大きく失望させたことは記憶に新しいところですが、多くの日本国民は沖縄問題の根幹にある歴史的背景をほとんど知らないのが実情です。琉球沖縄人の本土に対する鬱屈した感情の根源となったと言われるこの島津氏の琉球侵攻を、歴史ノンフィクションとして戦国大名島津氏の九州での覇権活動・豊臣秀吉のアジア征服戦争・徳川政権の対明交渉というスペクタクルの中で描いた若手琉球史研究者の力作です。琉球沖縄の歴史を理解する入り口の一つとしてお薦めします。

中村　隆

（科学技術館学芸員、サイエンスライブラリー担当）

科学技術館には、書籍数はあまり多くありませんが「サイエンスライブラリー」というコーナーがあります。夏休みには宿題のネタを探す来館者（特に母親のほうが必死のようですが）にご活用いただいておりますが、今回は、科学館の関係者にお勧めしたい本をご紹介いたします。

『DNAの構造とはたらき－DNA図書館へようこそ』羽馬有紗（文・絵）、前田龍一郎（監修協力）、ベレ出版、2009年

DNAについて、どのように説明したらわかりやすく伝えられるだろうか。DNAをテーマにした展示や教育プログラムの開発に携わっている方の共通の悩みなのではないでしょうか。この本ではDNAの転写やたんぱく質の合成の過程

などを図書館と司書の仕事にたとえ、絵本のようなスタイルでわかりやすく説明されています。博物館と学芸員の仕事に例えた科学の本も考えたいですね。

『統計学がわかる：回帰分析・因子分析編―アイスクリームで味わう、"関係"の統計学』向後千春・冨永敦子著、技術評論社、2009年

店の成功を目指すアイスクリームショップの新米店長とアルバイトの大学生が、客数や客の好みの味について分析をするやりとりを通して、統計学をわかりやすく学べます。来館者へのアンケート調査などを行っている博物館が増えていると思いますが、重要なのは結果をいかに分析するかです。統計学はちょっと苦手だけど（かくゆう自分もですが）、これから博物館評価を行うという方は、まずはハンバーガーショップを例に挙げた前作と合わせて、この本を読まれることをお勧めします。

『演技と演出』平田オリザ著、講談社（講談社現代新書）、2004年

展示、実験ショーや工作教室などの教育プログラムを企画、制作または実演されている学芸員の方には参考になる一冊かと思います。この本では、演出家である著者が、演劇経験のない一般の方を対象に行ったワークショップの事例を紹介しながら、演出・演技の考え方や効果についてわかりやすく論じています。どんなに良い資料やデータが揃っていても、それを効果的に伝える演出と手法・技術の選択が適切でなければ、良い展示や教育プログラムにはなりません。この本を読んで、学と芸をバランスよくみがいてこそ学芸員であると改めて自分に言い聞かせています。

半田 昌之

（たばこと塩の博物館学芸部長）

学芸員としての私の読書は、産業技術史や博物館学などの領域を中心に、仕事に必要な情報収集のための拾い読みがほとんどです。そんななかで、今年になってから、仕事に関係しながらも心に残り、最後まで熟読した本のなかから、お薦めしたい3冊をご紹介します。

『平賀源内を歩く―江戸の科学を訪ねて』奥村正二著、岩波書店、2003年

平賀源内は、江戸時代の発明家として広く知られているが、科学技術の視点で源内を取上げた文献資料は少ない。本著は、源内の精力的な生涯を追いながら、彼の代表的な

科学技術的発明のエピソードやマルチな才能を紹介しつつ、田沼意次との関係も掘り下げる。早すぎた天才ともいわれる源内の生き様とともに、技術史からみた江戸の時代性が読みとれる。2009年に96歳で鬼籍に入られた著者が、永年研究を続けた江戸の技術史への思いが伝わる。

『「子ども力」を信じて、伸ばす』中村桂子著、三笠書房、2009年

生命誌を提唱する遺伝子学者が、生命科学的視点と自らの子育て体験に基づいて綴った親たちへのメッセージ。子どもを「生きもの」として捉え、彼らの生きる力を信じる。自然や他の生き物との触れ合いや、遊びのなかで活き活きと育つ子どもたちの姿からは、昔ながらの日本の子育てに通じる知恵が蘇る。著者の言葉には、博物館で子どもに接するうえで役立つヒントが沢山隠されている。

『「自然史博物館」を変えていく』大阪市立自然史博物館・大坂自然史センター編、高陵社書店、2009年

自然史博物館の目指すべき方向、地域や学校との連携の在り方について、悩みながら奮闘する学芸員とNPOの協働で展開される取り組みの、実践事例が豊富に紹介されている。財政、運営などの課題を抱え、閉塞感が漂う博物館界にあって、学芸員の志が博物館を活性化させることができることに気付くことのできる清涼剤のような本。2002年刊行の『「学校」・「地域」と自然史博物館』とセット読みがお薦め。

山下 治子

（「ミュゼ」編集長）

『科学者ってなんだ？』梶雅範編著、丸善、2007年

タイトルが単刀直入だ。科学者はいつ誕生したのか、学

術論文のシステムは？研究者になるには？研究者の倫理とは？など現代の科学者をとりまく状況や課題について若手研究者やジャーナリストが執筆している。とくに、日々すんなり受け入れている「サイエンティスト」という言葉さえ、19世紀にケンブリッジ大学の哲学教授ウィリアム・ヒューエルが提案した造語だったことには驚いた。また、テレビの科学番組ディレクターの村松秀氏は、伝えるのではなく伝わるかどうか、すなわち「エル」ではなく、「ワル」が目的だとする。このあたりは科学館にも通じるだろう。「ワルをめざす科学館」といったら、違った層の来館者も期待できるかもしれない。巻末の「読書案内」もうれしい。

『著作権の世紀―変わる「情報の独占制度」』福井健策著、集英社（集英社新書）、2010年

ネットが使えないとストレスがたまる方も多いのでは？それだけインターネットの普及も科学や技術の発展ゆえだが、それと同時に科学とは分野を異にする絵や文5章、曲など作品（著作物）に対する「著作権」の世界も変貌している。すなわち、ホームページやブログの原稿、デジカメでの写真など多くの人々が多くの著作物を生み出し、webを通じてそれらが大量に発信し、受信されているからだ。そのような時代にあって「著作権」をどう捉えていけばいいのか。ユーモアあふれる文章と多くの事例をもとに楽しく読み進めることができる。

『コミュニティを問いなおす―つながり・都市・日本社会の未来』広井良典著、筑摩書房（ちくま新書）、2009年

人や地域、社会のつながりについて、ケア、社会保障、科学、独我論といった多角的な視点から論じている。そのなかで、近代科学の基本的パラダイムは「人間と自然の切断」だったが、現代の科学は人間の全体性やコミュニティとの関わりを重視する、大きな構造変化のなかにあると指摘する。「コミュニティ」というテーマの深さと、幅広いアプローチ。科学をちょっと違った側面から捉えることができる。

和田　岳

（大阪市立自然史博物館学芸員、読書サークル担当）

時流に乗って、生物多様性に関わる3冊を紹介しよう。

『アリの背中に乗った甲虫を探して―未知の生物に憑かれた科学者たち』ロブ・ダン著（田中敦子訳）、ウェッジ、2009年

「あなたの故郷にも、月はありますか？」印象的な一文から始まる本書は、連作短編集のように、次々と未知の生物に憑かれた研究者を紹介しつつ、やがて地球がいかに生命に満ちているかを明らかにしていく。しかし、その地球の多様な生物相は危機に瀕している。

『生物多様性とは何か』井田徹治著、岩波書店（岩波新書）、2010年

危機的な状況にある世界の生物多様性を保全しようとする様々な取り組み。その一つに、経済の枠組みの中に持ち込んで、生物多様性を守ろうとする動きがある。この新しい動き紹介してくれる一冊。

この本を読んで世界の生物多様性を守るために何かしなくちゃ！と思ったら、まずは足下に目を向けてみよう。人の生活を守りつつ、いかに生物多様性を守っていくか。日本でもこの問題はまるで解決されていない。

『動物たちの反乱―増えすぎるシカ、人里へ出るクマ』河合雅雄・林良博編著、PHP研究所（PHPサイエンス・ワールド新書、2009年

サル、クマ、シカ、イノシシ、アライグマ、ヌートリア。日本中でこうした中大型哺乳類と人間との軋轢が問題になっている。兵庫県はこの問題に先進的に取り組んできており、その中心が兵庫県森林生物研究センター。そこの面々が、中大型哺乳類と人間との関わりと共存の可能性をついて、兵庫県における調査と取り組みを中心に紹介した本。

抽象的に生物多様性を守ろう！と叫んでも始まらない。ふと見ると庭にクマがいたらどうする？がんばって育てた作物がシカやサルに食われたらどう思う？まずは自分の問題として野生生物との共存を、生物多様性をどうやって守るかを、考えてみてはどうだろうか？

海 外 ニ ュ ー ス No.100 安井 亮

■セレクション

米フィールド自然史博物館で、蟻の生態展を開催中

たかがアリ、されど蟻。身近にいながら、シロアリ以外に、ほとんど注意が向けられることがないアリである。でも日常生活に蟻を主人公にした諺が案外あるものだ。「蟻の一穴天下の破れ」や「千丈の堤も螻蟻の穴を以って潰ゆ」は、小さな誤りや油断がもとで大事や大失敗を引き起こすことに使う。そうしたアリの生態を紹介した企画展「アリのロマンス」が、フィールド自然史博物館で開催中である。多くの写真、動画や、本物のアリのコロニーを使って、アリのユニークな生態が紹介されている。同展は、幼少よりアリに親しんできた同館の研究員コリー・モロー博士が手がけた。会期：2010年７月30日～2012年１月１日

The Romance of Ants.

Field Museum, Chicago.

http://www.fieldmuseum.org/exhibits/romanceants_tempexhib.htm

http://www.moreaulab.org/Home.html

米ボストン科学博物館で、レーザー展を開催中

レーザーは1960年にアメリカの量子光学の研究者メイマン（Theodore Maiman）によって発明され、現在に至るまで通信や軍事、あるいは医療分野で広く使われてきている。1961年には網膜剥離の手術に、そして1970年には膀胱結石の手術にレーザーが使われた。そうしたレーザーの原理と性質、および応用を紹介した特別展が、レーザー発明50周年を記念してボストン科学博物館で開催されている。独トルンプ社助成事業。

会期：2010年11月３日～2011年４月10日

Laserlab.

Museum of Science, Boston.

http://www.mos.org/exhibits_shows/coming_soon

http://www.50-years-laser.com/

米ミルウォーキー博物館で、世界最大規模のミイラ展を開催へ

古代エジプトをはじめ、オセアニア、アジア、ヨーロッパおよび南米で発見された古今東西のミイラ150体が、ミルウォーキー市立博物館で始まる「世界のミイラ」展（巡回展）で公開される。世界最大規模である同展では、自然にミイラとなったもの（つまり干からびたもの）から人工的に作られたミイラまで、さまざまなミイラの製法も紹介される。人間だけでなく、動物のミイラも見られる。同展の目玉は、ペルーで発見された紀元前4504年から4457年の間に生存したと思われる子どものミイラをはじめ、丁寧にミイラにされた古代エジプトのペットや、三十年戦争（1618-1648年）の期間に死亡したと思われるドイツのクライルスハイム男爵など。企画制作：ライス・エンゲルホルン（独マンハイム市）。

会期：2010年12月17日～2011年５月30日

Mummies of the World.

Milwaukee Public Museum, Milwaukee.

http://www.mpm.edu/mummies/

http://www.mummiesoftheworld.com/

米ミスチック・シーポート海事博物館で、アメリカの運河展を開催（終了）

今から200年前にアメリカで運河の建設が始まった。東部のコネチカット州、マサチューセッツ州、ペンシルバニア州、バージニア州や中西部のミシガン州で今でも見られる運河は、さまざまな物資の輸送や内陸部から海港に原料を輸送する大動脈として活躍している。そうしたアメリカの運河の歴史を紹介した特別展が、アメリカの代表的な海事博物館であるミスチック・シーポート海事博物館（コネチカット州ミスチック）で開催された。同展では、運河の歴史だけでなく、運河の閘門の扉、組積造、アーチ式水門、クレーンのしくみ等が工学的に紹介された。また運河づくりの体験と出発地から到着地までの最短距離を調べることもできるコンピュータ・ゲームも用意された。企画制作：アメリカ運河博物館（ペンシルバニア州イーストン）。

会期：2010年１月30日～10月11日

Building America's Canals.

Mystic Seaport Museum, Mystic.

http://www.mysticseaport.org

■常設展情報

米オーランド科学館で、地球と宇宙の常設展を2010年9月25日にオープン

Our Planet, Our Universe.

Orland Science Center, Orlando.

http://www.osc.org/index.php?option=com_content&view=category&layout=blog&id=103&Itemid=15

http://www.osc.org/index.php?option=com_content&view=article&id=294:pr-orlando-science-center-explores-our-planet-our-universe&catid=79:press-and-media&Itemid=149

米シアトル太平洋科学館で、健康とウェルネスをテーマにした常設展が2011年10月にオープンへ

Professor Wellbody's Health & Wellness Academy.
Pacific Science Center, Seattle.
http://www.pacsci.org/exhibits/

■企画展・特別展情報

豪国立博物館で、探検家ジェームズ・クックの帆船"エンデバー号"の航海探検展を開催中

会期：2010年9月15日～2011年1月30日
Exploration and Endeavour: The Royal Society of London and the South Seas.
National Museum of Australia, Canberra.
http://www.nma.gov.au/media/media_releases_index/exploration_and_endeavour/
http://www.nma.gov.au/exhibitions/exploration_and_endeavour/about_the_exhibition/

米ペギー・ノートバート自然博物館で、樹木の科学展を開催中

会期：2010年10月23日～2011年1月30日
Exploring trees Inside and Out.
Peggy Notebaert Nature Museum, Chicago.
http://www.naturemuseum.org/index.php?id=319

米サンディエゴ自然史博物館で、トカゲとヘビ展を開催中

会期：2010年10月16日～2011年4月3日
Lizard and Snakes.
San Diego Museum of Natural History, San Diego.
http://www.sdnhm.org/exhibits/lizardsandsnakes/

米サンタバーバラ自然史博物館で、コーヒーをテーマにした展を開催中

会期：2010年10月9日～2011年1月2日
Coffee: The World in Your Cup.
Santa Barbara Museum of Natural History, Santa Barbara.
http://www.sbnature.org/exhibitions/10.html

米サンタクルーズ自然史博物館で、さまざまな生物の骨をテーマにした企画展を開催中

会期：2010年10月2日～2011年2月26日
Bones: An Inside Look at Nature.
Santa Cruz Museum of Natural History, Santa Cruz.
http://www.santacruzmuseums.org/exhibits/current/index.htm

米モントシャー科学博物館で、「米ニューイングランド地方における気候変動の影響」展を開催中

会期：2010年9月18日～12月5日
Seasons of Change.
Montshire Museum of Science, Norwich.
http://www.montshire.org/exhibits/descriptions/seasons-of-change/index.html

米カーネギー自然史博物館で、「パウダーミル自然保護区の鳥類」展を開催中

Experimental Gallery: Birds.
会期：2010年9月24日～2011年3月19日
Carnegie Museum of Natural History, Pittsburgh.
http://www.carnegiemnh.org/press/10-jul-sep/091510schedule.htm

エクスペメンタリウムで、ひとの五感をテーマにした企画展を開催中

会期：2010年10月8日～2011年8月31日
Senses.
Expementarium, Copenhagen.
http://www.experimentarium.dk/index.php?id=3021

米グレートレークス科学館で、材料科学展を開催中

会期：2010年5月29日～2011年1月3日
Strange Matter.
Great Lakes Science Center, Cleveland.
http://www.glsc.org/
http://www.strangematterexhibit.com/visit.html

モントリオール科学館で、ガラスの科学展を開催中

会期：2010年5月20日～2011年3月16日
SiO2: The Science of Glass.
Montreal Science Centre, Montreal.
http://www.montrealsciencecentre.com/exhibitions/sio2-the-science-of-glass.html

米アメリカ自然史博物館で、脳ミソの中身展を開催へ

会期：2010年11月20日～2011年8月14日
Brain: The Inside Story.
American Museum of Natural History, New York.
http://www.amnh.org/exhibitions/brain/

＊(やすい・りょう) E-post: RGYasui@gmail.com

11月12月の特別展

開　催　館	展　覧　会　名	開催期間
岩手県立博物館	開館30周年記念特別企画展「いわての漆」	10月２日～11月７日
	テーマ展「大地（ジオ）を楽しむ旅へ」	12月５日～２月27日
秋田大学工学資源学部附属鉱業博物館	企画展「情報をつなぐ、情報でつなぐ。」	11月３日～12月12日
山形県立博物館	企画展「縄文のキセキ－半世紀の時を越えて－」	10月９日～12月５日
	共同企画展「私の宝物」	12月18日～２月13日
郡山市ふれあい科学館 'スペースパーク'	ホワイエ企画展「たんけん！宇宙ステーション」	11月２日～12月30日
ミュージアムパーク茨城県自然博物館	第50回企画展「筑波山 ブナとガマと岩と」	10月９日～１月10日
日立シビックセンター科学館	巡回展「台風がやってきた！」	12月１日～１月10日
栃木県立博物館	改革と学問に生きた殿様－黒羽藩主 大関増業－」	10月９日～11月23日
群馬県立自然史博物館	自然史フォトギャラリー「飯島正広写真展・WILD ASIA －アジア野生王国へようこそ－」	12月10日～１月30日
鉄道博物館	開館3周年特別企画展「御料車～知られざる美術品～」	10月９日～１月16日
入間市博物館ＡＬＩＴ	特別展「野生植物が語る武蔵野の景観－標本と植物画でみる入間市の自然－」	９月23日～11月23日
	第14回「むかしのくらしと道具展」	12月16日～２月13日
所沢航空発祥記念館	秋の特別展「日本人パイロット1世紀のあゆみ」展	10月23日～11月30日
埼玉県立自然の博物館	企画展示「カエデ&もみじ －多様なかたち、山のにぎわい－」	９月18日～12月５日
千葉市科学館	冬の企画展「地球から宇宙へ」	12月３日～１月10日
千葉県立中央博物館	秋の展示「きらびやかな世界の昆虫たち－多様な形と色彩－」	10月２日～11月28日
逓信総合博物館	特別展「年賀博覧会」	11月27日～１月30日
国立科学博物館	日本の航空宇宙100年記念「空と宇宙展－飛べ！100年の夢」	10月26日～２月６日
NHK放送博物館	海外放送局	11月16日～２月27日
	大河ドラマ50	12月７日～３月27日
先端技術館@ＴＥＰＩＡ	トピックス展示「キッズデザイン賞 2010」	10月５日～２月27日
船の科学館	企画展「海洋船舶画の世界～全館丸ごと美術館計画」	10月10日～12月19日
多摩六都科学館	中川達夫写真展「地球が宇宙にとけこむとき－北アルプス剱岳の星空－」	12月７日～12月26日
馬の博物館	企画展「馬のコイン ～繁栄のシンボル～」	10月２日～12月５日
	テーマ展「馬と暮らす」	12月11日～12月24日
はまぎんこども宇宙科学館	企画展「ドクター・オフネのおもしろ研究所～探ろう！船の科学～」	10月９日～１月10日
新江ノ島水族館	11月のテーマ水槽「水の中の働きものたち」	11月１日～11月30日
	12月のテーマ水槽「クリスマス～水の中の天使たち～」	12月１日～12月25日
黒部市吉田科学館	「宇奈月で発見！国内最古の鉱物ジルコンとは」	10月20日～11月23日
	巡回写真展「すばらしい自然を」	11月20日～12月19日
富山市科学博物館	「富山県ナチュラリスト協会写真展－とやまの自然を写す－」	10月30日～11月14日
	「第16回環境写真展－すばらしい自然を」	11月20日～12月５日
	企画展「私の身近な自然展」	12月13日～２月13日
佐久市子ども未来館	「子ども科学作品展」	11月20日～11月28日
	シリーズ企画展「長野県内の研究所－4」	11月27日～１月10日
岐阜県博物館	日本自然科学写真協会写真展「自然を楽しむ科学の眼2010-2011」	11月20日～12月26日
中津川市鉱物博物館	第14回企画展「あかい鉱物・あかい石－鉱物の石のふしぎ－」	７月18日～11月23日
	第27回私の展示室「太古の海のいきものたち－輝く石のオブジェ－」	12月19日～３月６日
ディスカバリーパーク焼津	特別展「くっつけ！磁石展」	９月11日～12月５日
あいち健康プラザ　健康科学館	秋の特別展示「ひらめき　脳育展」	９月18日～12月５日
	冬の特別展示「おとぎ話の中で　健康づくり」（仮称）	12月18日～３月６日
トヨタ博物館	企画展「甦れ！クルマたち～博物館のレストア活動～」	10月９日～１月10日
真珠博物館	特別企画展「完全版　東“貝”道五十七次　～江戸・日本橋から浪花・京橋へ～」	4月23日～平成23年4月3日
鳥羽水族館	企画展「おっ！特ダネ情報局」	９月１日～３月20日
	秋イベント「ナニコレ10種展」	10月８日～11月７日
滋賀県立琵琶湖博物館	企画展示「湖底探検～びわ湖の底はどんな世界？～」	７月17日～11月23日
	ギャラリー展示「近江のふるさと絵屏風と未来予想絵図」	12月19日～１月６日
きしわだ自然資料館	特別展「モササウルス」	11月３日～１月30日
兵庫県立人と自然の博物館	特別企画「ひょうごの生物多様性 －瀬戸内海vs日本海」	７月17日～12月26日
姫路科学館	作品展「第46回姫路市児童生徒科学作品展」（調査研究の部）	10月29日～11月14日
	企画展「おもしろマッチ展」	11月20日～12月12日
明石市立天文科学館	子午線標識建立100周年「子午線の文化展」	10月９日～12月５日
	2011年全国カレンダー展	12月11日～１月30日
出雲科学館	ノーベル賞を受賞した日本の科学者	10月５日～11月14日
	「みぢかなふしぎ」写真展	11月13日～12月28日
倉敷市立自然史博物館	第19回特別展「岡山県のレッドデータ生物」	７月17日～11月７日
広島市こども文化科学館	ボタニカルアートの世界	11月６日～11月17日
	第15回海の図画展	11月26日～12月５日
広島市健康づくりセンター健康科学館	ふしぎ！おもしろ！お口の魅力大発見！「知ってトクするお口の健康雑学」	10月30日～２月20日
防府市青少年科学館　ソラール	企画展「なつかしい玩具たち－ブリキの鉄人28号もやってくる！－」	10月16日～11月28日
山口県立山口博物館	サイエンスやまぐち2010「第64回山口県科学作品展」	10月29日～11月14日
	歴史常設展示第Ⅲ期「山口県の大正時代」	12月１日～４月24日

開　催　館	展　覧　会　名	開催期間
徳島県立あすたむらんど子ども科学館	巡回展「ノーベル賞を受賞した日本の科学者」	12月４日～１月10日
愛媛県総合科学博物館	巡回展「ガリレオの天体観測から400年－宇宙の謎を解き明かす－」	12月11日～１月30日
	巡回展「エネルギー商店街」	12月12日～４月７日
北九州市立いのちのたび博物館	禅寺広寿山の名宝～小倉にひらいた中国文化の華～」	10月９日～11月28日
北九州イノベーションギャラリー	企画展「楽しい科学模型展」	10月８日～11月28日
福岡県青少年科学館	ワイルドライフアート展「自然の王国2010」	12月４日～12月23日
佐賀県立博物館・美術館	玉手箱Ⅴ「野鳥観察のすすめ」	11月23日～１月23日
宮崎県総合博物館	「宮崎の海のいきもの展」	10月23日～11月28日
	「特選！蔵出し展」	12月18日～１月30日
沖縄県立博物館・美術館	特別展「海のクロスロード　八重山」	９月24日～11月23日
	企画展「掘り出された琉球王国のグスク及び関連遺産群 ～いにしえの眠りからめざめた世界の宝～」	12月７日～12月26日
	企画展「アイヌ～美を求める心～」	12月３日～１月10日

※開催期間については、スペースの都合により月日のみの記載となっております。終了が2011年となる催しについても、年の表記を省略させていただきました。ご了承ください。

リニューアル

福井県立恐竜博物館

［更新内容］開館10周年を記念し、段階的にリニューアルを実施。休憩広場「ティラノガーデン」を屋外に整備。B1F通路天井にCG映像投射。カマラサウルス産状復元を配し、「古代世界」へいざなう。更新面積1,275㎡。1Fでは全長７ｍをこえるティラノサウルスロボットが観客を迎える。恐竜全身復元骨格５体と肉食恐竜３種の頭骨を新規展示。また、「福井県の恐竜」「日本の恐竜」を追加し充実させた。

［公 開 日］平成22年７月９日

［施工業者］乃村工藝社

のとじま臨海公園水族館

［更新箇所］新水槽「ジンベエザメ館 青の世界」の増築

［展示内容］水量1,600トンの水槽（日本海側最大）に世界最大の魚類であるジンベエザメのほか、アカシュモクザメ、ツマグロ、トラフザメ、ツバメウオ、マアジ、ウメイロモドキなど17種約3,500匹を展示。

［展示面積］延床面積1,111.17㎡、展示水槽面積253㎡

［公 開 日］平成22年８月20日

つくばエキスポセンター

［更新箇所］１階「科学万博－つくば'85メモリアルゾーン」

［更新内容］1985年に筑波研究学園都市で開かれた「科学万博 - つくば'85」の開催25周年を記念して、同ゾーンに当時の日本の先端科学技術・産業技術の成果を紹介する「今を築いた日本の先端科学技術 - 1980年代を振り返って」と、科学万博の関連グッズを紹介する展示を拡充。

［更新面積］80.64㎡

［公 開 日］平成22年９月18日

［施工業者］NECデザイン＆プロモーション（株）

小さなボディーに大宇宙を詰め込んだ、最新デジタルプラネタリウムシステム

メディアグローブⅡ (MEDIAGLOBE-Ⅱ)

メディアグローブⅡは世界で初めてフルカラー投映を可能にした小型デジタルプラネタリウム”メディアグローブ”の後継機種。地上で見られる星空の投映だけでなく、３Ｄ天文データベースによる宇宙旅行シミュレーションまで可能になりました。星空自動解説機能、簡単操作で番組を自作できる機能やマクロボタンなど使い易さも格段にレベルアップして運営面もご心配いりません。小規模スペースに神秘的な大宇宙をお届けます。

コニカミノルタ プラネタリウム株式会社

東京事業所　〒173-0003　東京都板橋区加賀 1-6-1　TEL (03) 5248-7051
大阪事業所　〒550-0005　大阪市西区西本町 2-3-10 西本町インテス 11 階　TEL (06) 6110-0570
東海事業所　〒442-8558　愛知県豊川市金屋西町 1-8　TEL (0533) 89-3570

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向／教育用地学標本

since 1974

地学標本／化石・鉱物・岩石
古生物／レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

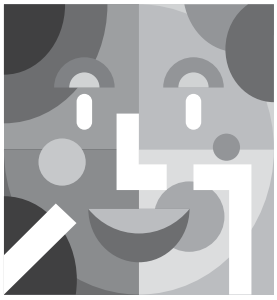
◆常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店１Ｆ　TEL.03(3354)0131(代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks
株式会社 東京サイエンス
TEL.03-3350-6725 FAX.03-3350-6745
http://www.tokyo-science.co.jp
E-mail:info@tokyo-science.co.jp
〒151-0051渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

Practical Specimens for Study of Earth Science

NOMURA

人が集う場、
そこにはいつも
楽しさとか、
おどろきとか、が
溢れています。



Prosperity Creator
NOMURA
http://www.nomurakougei.co.jp

集客環境づくりの調査・コンサルティング、
企画・デザイン、設計、制作施工
ならびに各種施設・イベントの活性化、運営管理

株式会社 乃村工藝社
本　　社：東京都港区台場2-3-4 Telephone 03-5962-1171(代表) 〒135-8622
営業拠点：札幌・仙台・名古屋・大阪・岡山・広島・高松・福岡・那覇・北京・上海
シンガポール・ミラノ・ニューヨーク

Panasonic
ideas for life

パナソニックだから、
可能なソリューションがある。

Core Products
Security
Cross Media
Mobility

Total Solution
コンサルティング営業
SI・アプリケーション開発
施工・設置
保守・メンテナンスサービス
運用サービス

Challenge to Change!　パナソニック システムソリューションズ ジャパン株式会社
詳しくはホームページで panasonic.co.jp/pss/pssj/

より良い「社会交流空間づくり」にむけて――。

調査・企画・デザイン・設計・制作・施工・監理・
運営およびコンサルティング・プロデュース

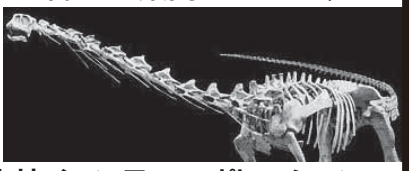
Tanseisha

株式会社丹青社　〒110-8549　東京都台東区上野5-2-2
TEL.03-3836-7221(代表)　http://www.tanseisha.co.jp
札幌・仙台・名古屋・大阪・福岡・那覇

*ISO14001認証取得・プライバシーマーク認定取得

－ ご希望の恐竜・化石・動物・人類の
標本及び模型を探しご案内いたします －

マラウイサウルス
ティタノサウルス科
全長－10m



株式会社　ゼネラルサイエンス コーポレーション
〒107-0052　東京都港区赤坂3-11-14 赤坂ベルゴビル802
TEL:03(3583)0731 ／ FAX:03(3584)6247
e-mail:sizensi@shibayama.co.jp
http://www.shibayama.co.jp

全科協ニュース編集委員
國府田 良樹（ミュージアムパーク茨城県自然博物館資料長）
佐久間 大輔（大阪市立自然史博物館学芸課学芸員）
田代　英俊（科学技術館企画広報室長）
畠山　泰英（八坂書房編集部編集員）
平濱 美紀子（ディスカバリーパーク焼津主任）
亀 井　修（国立科学博物館事業推進部連携協力課長）

全科協事務局
国立科学博物館 事業推進部 連携協力課（担当：守井）
Tel.03-5814-9863　Fax.03-5814-9898
発行日　平成22年11月１日
発　行　全国科学博物館協議会©
〒110-8718 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
印　刷　島崎印刷株式会社